

## 『瀛寰志略』における日本の記述

小林 寛

### 要旨

一八四八年に刊行された徐繼畚の『瀛寰志略』「自序」には「泰西人は善く遠きを行き、帆牆もて四海を周り、至る所、輒ち筆を抽き圖を繪く。故に其の圖は獨り據る可きを為す」とあり、大航海時代を経た西洋の、地球に関する知識が詳細で、その地図が優れていることが名言されている。『瀛寰志略』は「地球」から説き起こされて、西洋から得た知識を前面に押し出し、「自序」にも泰西人に問い質して記述を成したことが記されている。世界の明確な認識の上で中国が進むべき道が模索され、日本については中国と「同文」で、オランダ・中国と互していると評される。記述の量は多いとは言えないものの、日本の西洋に対する対応に注意が払われている。

キーワード 『瀛寰志略』 徐繼畚 日本観 寛永期

### はじめに

魏源の『海国図志』はアヘン戦争の結果を踏まえて作成された書で、そこには海外に目を開き清朝を開国して西洋の技術を導入し改革を主唱する「以夷攻夷」の考え方が表れている。西洋の技術を自らのものにできれば、西洋の技術によって西洋を屈服することもできる。ひいては中体たる「徳」の政治によって世界は一つになるという見込が存する。『海国図志』には世界の情勢が記され、日本について記した部分「日本島国」の中には、それまでの日本に関する記述がまとめて引用されている。魏源の『海国図志』と同時期に西洋を評価して書かれたものとして名高いのが徐繼畚の『瀛寰志略』であった。

本稿においては、『瀛寰志略』の日本についての記述を示すことで、近代の思想家に影響を与えた徐繼畚『瀛寰志略』における日本の文化とその背後にある宗教に関する記述の特徴を探っておきたい。さらには徐繼畚の『瀛寰志略』が魏源の『海国図志』の意識とつながりがあることを確認しておきたい。

第一節 徐繼畲と『瀛寰志略』

魏源の『海国図志』と同時期に成立して、後世に影響を与えたと  
言うことができる、徐繼畲の『瀛寰志略』について、本項ではその  
著者である徐繼畲の概略を述べておきたい。<sup>1)</sup>

徐繼畲は、字は健男、松龕と号した。一七九五年に山西省五台县  
東冶鎮に生まれた。一八一三年一八才で郷試において举人になる。  
そして一八二六年三十一才に進士となった。以降、陝西道監察御使、  
廣西潯江、福建延津省邵道、汀漳龍道、廣東監運使、廣東按察使、  
福建布政使、廣西巡撫などを歴任する。一八四〇年アヘン戦争後、  
福建巡撫となる。このおりに『瀛寰志略』を記した。しかしこれに  
よってかえって「妖言惑衆」「有損國體」との批判をうける。さら  
に福建巡撫兼閩浙総督に任ぜられていたときに「神光寺英人租屋事  
件」が発生し、一八五二年職を解かれて二品から四品に降された。  
この間、徐繼畲は多くの著作を残している。一八六五年太平天国が  
鎮圧されると、徐繼畲は京城に行き総理各国事務衙門に任じられ三  
品となった。一八五二年「傳旨革職」命を奉じて朝廷に入り、京師  
同文館の校長になった。一八六九年郷里に帰り、一八七三年没した。

第二節 「自序」

徐繼畲『瀛寰志略』には寄せられた劉韻珂の「叙」と、陳慶偕、  
彭蘊章、鹿澤長の「序」三篇に続いて「自序」があり、編輯の経緯  
が以下のように示されている。

地理は圖に非ざれば明らかならず、圖は履み覽るに非ざれば悉  
くせず。大塊は形有り、意を以て伸縮を爲す可きに非ざる也。  
泰西人は善く速きを行き、帆牆もて四海を周り、至る所、輒ち  
筆を抜き圖を繪く。故に其の圖は獨り據る可きを爲す。

「地理は図でなければ明らかならず、図はあるいて覽たのでな  
ければ悉くはえがけない。大きな塊はかたちをもち、このそのまま  
に伸縮することはできない。泰西人はよくとおいところまで行き、  
ふねで四海をめぐり、いたったところは筆をひいて図をかいた。だ  
からその図はたよることができぬ。」このように述べて、大地には  
形があるのでこのままにかくことは出来ないし、地図は実際に  
其の地を履み覽ることでも明らかになるものであるという。泰西人は  
遠くまで出かけ四海を巡って地図を作成したものであるから、その  
地図は信頼に足ると明言している。

道光癸卯、厦門に公駐するに因りて、米利堅人雅裨理、西國多  
聞の士に晤ふ。能く閩語を作し、攜へるに地図冊子の繪刻極細  
なるを有す。苦しくも其の字を識らず、因りて十餘幅を鈎摹し、  
雅裨理に就きて之を詢譯し、粗ぼ各國の名を知る。然ども匆卒  
として能く詳かならざる也。

「道光癸卯、厦門に公駐したことから、アメリカ人雅裨理という西  
國の多聞の士にあつた。よく閩南語をあやつり、地図冊子でえがき  
かたがきわめてくわしいものをもつていた。ざんねんなことにその  
字をしらなかつたために、十余幅をひきうつして雅裨理についてこ

れを詢訳し、おおよそ各国の名を知った。けれどもかんだんであつてくわしく出来なかつた。」道光癸卯はアヘン戦争後の一八四三年にあたる。泰西人の技術、特にアメリカ人の雅裨理と知己を得て、その地図をもとにして各国の名を知ったことが率直に述べられている。

「明年、再び厦門に至り、郡司馬霍君蓉生、購て地圖二冊、一つの大は二尺餘、一尺許なるを得。雅裨理の冊子と較るに、尤も詳密を爲す。并せて泰西人の漢字の雑書の數種を覓め、余は復た蒐求して若干種を得。其の書、俚にして文ならず、雅に淹る者は目に入ること能ず。余は則ち薈萃採擇して、片紙をも得れば亦た録を存して棄ること勿し。泰西人に晤ふ毎に、輒ち冊子を披きて之を考證す。域外諸國の地形時勢に於ては、稍稍として其の涯略を得。乃ち圖に依て説を立て、書を讀みて信ず可き者を采て、之を衍て篇を爲す。之を久しくして、積て卷帙を成す。一書を得る毎に、或は新聞有れば、輒ち竄かに改め増補し、稿は凡そ數十易。癸卯自り今に至るまで、五たび寒暑を閱る。公事の餘、惟だ此をのみ以て消遣を爲し、未だ一日として輟めざる也。」

「明年、再び厦門に至り、郡司馬の霍蓉生君が、購つた地圖二冊、一つの大きさは二尺余り、一尺許りであるものを得た。雅裨理の冊子と較べると、さらに詳密なものであつた。あわせて泰西人の漢字の雑書種をもとめて、余は復た蒐求して若干種を得た。その書は、いやしいものであつて文ではなく、雅にあふれている者は目に入れることができな。余は則ち薈萃採擇して、片紙でも得れば、亦た

おぼえがきを存して棄ててをしなかつた。泰西人にあうたびに、輒ち冊子をひらいて、これを考證した。域外の諸國の地形や時勢については、ようやくその涯略を得た。そうして図に依つて説を立て、書を読んで信じられるものを采つて、これを衍ばして篇をつくつた。こうして久しくして、積みかさなつて卷帙を成した。一書を得るたびに、あるいは新たな聞があれば、すなわちひそかに改め増補し、稿はすべてで數十たびも易えた。癸卯から今に至るまで、五たび寒暑を閱た。公事の余に、ただこのことだけをして消遣をなし、まだ一日としてやめることはなかつた。」こうしてさらに地圖を求めて修訂し、あわせて泰西人の漢字の雑書を求めて記述をかさね、片紙があれば記し、泰西人に会えば問いただして、諸國の地形や時勢について涯略を得たという。努力を重ねて稿を成していった経過が書かれている。

陳慈圃方伯、鹿春如、觀察して之を見、以て存す可しと爲す。之が其の舛誤を刪訂し、分けて十卷と爲す。同人の求めて觀る者は、多く愆め憑めて付梓す。乃ち之に名けて瀛寰志略と曰ひて、其の縁起を記すこと此の如し。道光戊申秋八月、五臺の徐繼畬、識す。

「陳慈圃方伯と、鹿春如とが、觀察してこのようすを見て、存するのがよいとした。この（書の）舛誤を刪訂して、分けて十卷とした。同人で求めて觀るものは、多く愆め憑めて付梓した<sup>2</sup>。そうしてこれに名づけて瀛寰志略といい、その縁起を記すことはこのようである。道光戊申秋八月、五臺の徐繼畬、識す」徐繼畬はこのように

いい、「瀛寰志略」を世に出す経過を記している。道光戊申は一八四八年にあたる。

### 第三節「瀛寰志略」の日本の記述

徐繼畲の『瀛寰志略』は、各国志に入る前に巻一の「地球」の項目から説き起こされている。

地形は球の如く、周天の度数を以て、經緯の綫を分け、縦横に之を畫く。一周する毎に三百六十度を得、一度毎に中國の二百五十里を得。海は十の六を得て奇有り、土は十の四に及ばず。（泰西人の推算は甚だ詳かにして、茲に贅せず。）

「地形は球のようであつて、周天の度数によつて、經度と緯度の綫を分けて、縦と横に經線と緯線とを描く。一周するごとに三百六十度とし、一度ごとに中國の二百五十里となる。海は十分の六を得てあまりがあり、おかは十分の四には及ばない。（泰西人の推算は甚はだ詳かであつて、ここにことばをついやさない。）」と述べる。卷頭にあたる記述であるにもかかわらず、ここにも泰西人の知識の確かさを明示している。

徐繼畲『瀛寰志略』において日本の記述は「亞細亞東洋二国」の項目に、次のようになされている。

日本、古は倭奴と稱し、其の國、東海の中に在り、平らかに三  
大島を列ぶ。北を對馬島と曰ひ、高麗の南境と相ひ直ひ、一夜

にして達し、明の季に閩白の亂を為すは是なり。中を長崎と曰ひ、土は較べて大きく、浙海の普陀山と相ひ直ひ、内地の商船互に此に市す。南は薩駒馬と曰ひ、浙の温台と相ひ直ふ。人は強健、刀は最も利く、兼ねて馬を産す。明の嘉靖年間、閩浙を擾す倭寇は薩駒馬なり。

ここでは次のように言う。「日本は昔、倭奴といい、その国は東海の中にあり、ならんで三つの大きな島がつらねている。北を對馬島という。高麗と南境を向かい合わせにして一夜でわたることが出来る。明の季に閩白が亂を為したのはここである。中ほどのものを長崎といい、くには較べて大きく、浙江と普陀山とに真むかい、内地の商船は此で市をなしている。南を薩駒馬といい、浙江の温州と台湾に真むかいあつている。人は強健であつて刀は最もするどく、かつ馬を産する。明の嘉靖年間に閩浙をさわがした倭寇は薩駒馬である。」<sup>3</sup>ここにみられる、こうした日本理解が近代の東アジアの思想家における日本理解の基礎となつた事実は大きい。ここに述べられている長崎とは長崎のある本洲をさしている。薩駒馬とは薩摩で九州を指している。

三島の外、小島は甚だ多し。王は長崎の東北に居る。地名は「彌耶谷」、譯して「京」と曰ふ。官は皆な世祿され、仍ち漢制の刺史二千石を稱す。文字は中國と同じくして、讀むに倭音を以てす。<sup>4</sup>

「三島のほか、小島は甚だ多い。王は長崎の東北に居る。地名は

『彌耶谷』、訳して『京』という。官はみな世々禄をもらい、すなわち漢の制の刺史二千石を称する。文字は中国と同じで、読むのには倭の音を以てする」という。

彌耶谷の発音は「みやこ」であって「京」を意味するというのであるから、長崎は本州をさす。添付されている地図を見ると長崎は九州の位置に名付けられているものの、本州には名がなく、混同されている可能性もある。王則ち天皇は都にあるという。九州が薩摩になっていて本州には島の名が書かれていないで都の表示もなく、現在の東京湾には横浜と記載されている。日本の領域が矮小化されている感がある。文字についても中国と同じと述べていて、発音だけが日本語をされているという理解であって、仮名についての言及が無く、或いは仮名も漢字の一種という理解を示しているのであるうか、これも矮小化されている感を抱かせる。

國事は上將軍に柄らしめ、王は預らず。僅に、厚く糶れたものを食す。方物を受け、上將軍は時に展覲有るのみ。歴代以來、王を争はず、上將軍を争ふのみ。故に、上將軍は第宅し、時に新主に更はり、王の姓を易ること無し。<sup>7</sup>

「國事は上將軍に柄らせ、王はあずからない。わずかに、厚くえらばれたものを食している。方々の物を受けていて、上將軍は時々お目にかかるだけである。歴代以來、王は争われることがなく、上將軍を争うだけである。だから、上將軍は第宅し、時に新主に更わるだけで、王が姓を易ることがない」という。

國の政治は上將軍が権力を有して、天皇が政治にはあずからない

ことが明示される。天皇に、上將軍は時々お目にかかるだけであるという。天皇と將軍の關係については、天皇は歴代以來、皇位が争われたことがなく、將軍の地位が争われるだけであるという。上將軍は第宅し、時に新主に更わるだけで、王が姓をかえることがない、すなわち、革命がないと記している。

寛永を以て年号と為して歴世改めず。立法は嚴にして、人は門争を少なくし、法を犯す者は輒ち山谷に走りて自ら殺す。童僕を呼ぶは掌を鳴らせば則ち應じ、竟に日がな人の聲を聞かず。佛を好み、祖先を敬い、香花佳果を得れば、必ず佛に供ぐ。或ひは祖の墳に走りて献ぐ。俗は潔を尚び、街衢は時々掃滌除す。

「寛永を以て年号となして歴世改めない。立法は嚴であって人は闘争することは少なく、法を犯したものはそのまま山谷に行つて自らしぬ。童僕を呼ぶには掌をうちならせばすぐに應じ、日がな人の聲を聞くことがない。佛を好み、祖先を敬い、香の花や佳き果などを得れば、必ず佛にささげる。或いは祖先の墳墓にいつて献げる。俗は潔を尚び、街衢はいつも掃除されている」という。「寛永を以て年号として歴世改めない」と記されることから、ここには江戸時代寛永年間の情報が記されているのであろうとみられる。立法は嚴であって、人はたがいにあらそうことは少なく、法を犯したものはそのまま山谷にいつて自らしぬという。また、童僕を呼ぶには掌をうちならせばすぐに應じ、日を過ごしても人の声を聞くことがないと記す。

宗教に関しては、佛を好み、祖先を敬い、香花佳果を得れば、必

ず佛にささげ、或いは祖先の墳墓にいつて献げ、俗は潔を尚び、街衢は時々掃除されていると記している。仏教については記述があるものの、神道に関する記述はない。ただし祖先を敬い清潔を旨とするなど、日本人からみれば神道と重なる内容が記されている。これに続けて次のように言う。

男女皆大領闊袖にて、女は長さを加へて以て地を曳く。繪は花卉を染め、褌裏帛幅、短襪を著し、絲履を曳く。男は鬚を髡りて頂額を剃り、鬢髪を留めて腦後に至り、寸餘を闊くす。縮もて髻と為し、髪は長きは之を剪る。女は多く美髪にして、日に洗滌し、薫るに楠沈を以てす。前後、髻を挽き玳を挿し簪を瑁す。その男女眉目肌理は華土を彷彿させ、東方秀氣の鍾する所を信ぜしむるなり。長崎と普陀と、東西對峙して水程四十更(六十里を一更と為す)。洋を横きり、翦り渡るに、風浪極めて險なり。厦門より長崎に至るは水程七十二更。臺灣の鷄籠山の北より米糠洋、香竈洋を渡るに、北風もて五島門從り進む。南風もて天堂門從り進む。前明の中葉、大西洋の葡萄牙は、嘗て其の海口に據らむと欲して、又た天主教を以て其の土人を誘ふ。日本は之と戦ひ、荷蘭は兵船を以て日本を助け、葡萄牙は逃げ去る。故に其の國と通商する者、中國と荷蘭のみ。産する所の者は、紅銅、硫磺、海菜の類なり。(海國見聞録を節采す。)<sup>10</sup>

この節では先ず次のように述べる。「男女はみな大きな領の闊い袖(のきものをきているの)であつて、女は長さを加えていて地を曳く(ようである)。繪は花卉を染めていて、褌の裏は帛の幅、短

襪を著わし、絲履を曳く。男は鬚を髡りて頂額を剃り、鬢髪を留めて腦後に至り、寸餘を闊くしている。縮を髻とし、髪は長いものはこれを剪る。女は多く美髪であつて、日々に洗滌し、薫るのには楠や沈香を以てする。前後、髻を挽き、玳を挿し、簪を瑁する。その男女眉目肌理は華土を彷彿とさせ、東方秀氣の鍾する所を信じさせる。』ここには日本の習俗が描かれている。先に述べたように日本の寛永期の風俗であろうと推測される。

「長崎と普陀と、東西對峙して、水程は四十更(六十里を一更とする)。洋を横きり、翦り渡るに、風浪は極めて險しい。厦門から長崎に至るには水程七十二更。臺灣の鷄籠山の北より米糠洋、香竈洋を渡るには、北風によれば五島門から進む。南風によれば天堂門から進む」として、日本へ向かう道筋が記される。その道筋は当然ながら中国からの道程を示す。これに続いて日本と西洋との関係について言及がなされている。

「前の中葉に、大西洋のポルトガルは、かつてその海口にやろうとして、又た天主教<sup>11</sup>によつて、そのくにびとを誘つた。日本はこれと戦つて、オランダは兵船によつて日本を助けて、ポルトガルは遁げ去つた。それでその國と通商するのは、中國とオランダだけなのである。(日本で)産するものは、紅銅、硫磺、海菜の類である。〔海國見聞録〕を節采した。」という。以上をみると、日本と通行するオランダが日本を助けたことが記されていて、義が意図されていることが知られる。中国が日本に通行するのもそうしたつながりがあることを意識させる文章となっている。天主教を表向きにしたポルトガルの侵略の意図を日本がオランダに助けられながら斥けたと記されている。

おわりに

先に見た『瀛寰志略』の「自序」では次のように記されていた。  
 「泰西人は善く遠きを行き、帆牆もて四海を周り、至る所、輒ち筆を抜き圖を繪く。故に其の圖は獨り據る可きを為す」<sup>12</sup> ここにも表れているように、徐繼畬の『瀛寰志略』においては、西洋の大航海時代を経た地球の知識が詳細であると、その地図の長所が明言されている。『瀛寰志略』は「地球」から説き起こされていて、西洋の知識を前面に押し出している。「自序」を見ても西洋人に問い質して記述を成したことが明確に示されている。その記述は中国の域内にとどまろうとはしない。むしろ域外を、地球の全体を記述しようとしている。こうして世界の明確な認識の上で中国が進むべき道が模索されているということができる。また、日本については中国と「同文」で、オランダ・中国とうまく互していることが評されている。徐繼畬『瀛寰志略』の日本に関する記述をみると、日本に関する理解は素朴な段階にあることを感じさせる。また『海国見聞録』を引用すると自らも述べる。

『瀛寰志略』は一八四八年に刊行されている。『海国図志』は一八四四年にできている。魏源『海国図志』においても、徐繼畬『瀛寰志略』においても西洋の強勢、西洋人の知識の詳細であり確実であることが意識されている。ここにアヘン戦争の影響の大きさを見ることが出来る。また、徐繼畬『瀛寰志略』の日本の記述に注目すると、その量が多いとは言えないものの、日本の西洋に対する対応に注意が払われていることがわかる。



註

- 1 徐繼畬『瀛寰志略校注』文物出版社二〇〇七年の記述に依った。
- 2 書物として出版したということをさす。
- 3 徐繼畬『瀛寰志略校注』文物出版社一〇頁を参照されたい。
- 4 同上を参照されたい。
- 5 Miyaokaとなつて日本語音を写そうとしている。
- 6 地図を掲げておきたい。
- 7 同上を参照されたい。
- 8 同上を参照されたい。
- 9 「天主教」は對本、抜本では「洋教」とされている。
- 10 同一二頁を参照されたい。
- 11 「天主教」は對本、抜本では「洋教」とされている。
- 12 徐繼畬『瀛寰志略』九頁を参照されたい。

(こばやし・ひろし)

## A Description of Japan in “Ying Huan Zhi-Lue”

Hiroshi Kobayashi

This article inquires into “Ying Huan Zhi-Lue(『瀛寰志略』)” written by Xu-JiYu(徐繼畲). His document implies that he knew the manners and custom of Japanese in Kan-ei(寛永)-era. And he paid attention to the relationship between Japan and Europe.

Keywords: “Ying Huan Zhi-Lue” Xu-JiYu A Description of Japan Kan-ei era